

追悼 内田博

さよならなら内田博

吉田 欣一

内田博が二月二十五日午後九時五十分死んだと二十五日午後十時三十分頃に瀬戸の伊藤正齊から電話連絡があった。とうとう内田も死んだかとの思いが寂莫という言葉にかさなってくる。内田の死ということはまたひとりプロレタリア文学運動にかかわった仲間が去ったという淋しさが身につまされてきた。周辺が淋しくなる。特に内田との長い長いつきあいがそのことをかりたてる。

プロレタリア文学が内田、私の若い時代に与えた影響はその深さについては今の若い世代には一寸理解できがたいものがある。内田について中野重治が——（そして記憶のままに言えば彼は非常に貧乏しているらしかった。それは印象からいえば生れたときからの貧乏で、一時はそうでなかったのを何かの加減で貧乏になったというのとはちがっていた。

田にはその全詩集は生きていると想っている。あれは何年前になるか、夏の盛りの時であった。我が家を訪れた内田とビールで乾杯した。その時に色紙に（人民詩精神）と内田は書いてくれた。瘦身裸になって語り合った事がなまましく想い出されてくる。

その時に今も忘れない論争があった。いささか酔っぱらった私が「社会主義的リアリズム」が何故駄目なのだ俺は社会主義的リアリズムでやるぞと気炎をあげた。その時内田は私に政党的発想に依る社会主義的リアリズムの悪について、その事で苦闘して来た文学の在り方と個について、私に論すように彼に似合わない雄弁で語った。そのことが、うんそれは解っている。しかし社会主義的リアリズムはもう古いかな、それなら未来への展望をどこにおくかの視点がないと糞リアリズムになるんぢあないか。吉田よそれを観念的というんだと内田はいい、それでは人民詩精神に乾杯ということになった夏の日の想い出である。こういう言い方は誤解を招くおそれがあるが、内田にしろ私にしろ生活のように乏しい文学的才能を駆りたて駆り立てて来たものは何であったのだろうか。お互いに死ぬ日まで働きに働かねばならぬだろう。プロレタ

子供の時分から貧しくて、はたらきにはたらいでもそれが続いたという性質のものだった。——やはり印象からいえば、内田には詩の上でも生き方の上でも、ぱりっとしたところとか雄弁なところとかいうものがほとんどなかった。条件次第で人をボスに仕立てて行くもの、それが彼には生得ないらしかった。世界には日当りのわるい大きな生活があり、内田にはそれがどこまでもついてまわってくるらしく見えた。人を踏み台にしてのしあがって行くということがそこでは生じない。絶えず被害者の立場に立たされてしまう。中野重治から見た印象として内田の詩集『三池の冬』の序文に書いているが、この言葉は何時までも私のこころに残っている。そのことは内田だけの事でなくて私たちがプロレタリア文学に接近して行った根本的なものとして、

生活の中で貧乏らしかったのではなく貧乏そのものの生活の中の文学として、労働者階級の闘いの文学の文学精神の確立が若さの中で苦闘した時代の仲間としての内田の姿とおのおの努力がそこで積重って来て、詩を持続して来たものがあったのである。『内田博全詩集』を提出したことによって内田はおのれの姿勢を示した。今は一片の骨となっても内

リア文学運動の中で得た思想が生涯つきまといそのことが一つの夢としてあり社会変革の思いはつきることなく続くのである。ここでまた私は内田いろいろなあつたな、死んだお前はそのいろいろあつたことが終つたが、私にはまだまだ今後辛い思いがいろいろあるだろうが頑張って生きて行くよ。戦時中には中野重治や宮本百合子から教えられ、詩の勉強では小野十三郎には影響をうけ、近頃では秋山清と、共通した私達の交友関係はどこでそれはそうなって来たのかその事をしきりに思う。『煙』誌上で内田が書きたがっていたこととして田木繁論が一回だけ発表されている。私の田木繁ノートを読みたがっていた。田木繁の仕事への関心の深さも共通していた。絶筆のようになった田木繁論の続きはもう書かれはしない。内田よ心残りであつたらう。

昨年の夏のはじめ頃だったか息子の内田麟太郎が、父は肝臓ガンで危いと言って来て、生きていこううちに全詩集後に書いた作品をまとめて詩集を出してやりたいとのこと、それはせきこむような思いが伝って来る連絡であった。内田も肝臓ガンか、中野重治も肝臓ガンではなかったか、一瞬私はたじろぐ思いがあり、大至急その詩集に文章を書いてくれ

さむい音

小宮 隆弘

ブロック塀を
直線にいく猫の
交尾のさげびをきく
霜なのか
雪なのか
肩からの寝床の冷えに
暗闇の中で見開いた眼は
市立病院東病棟五〇八号室
六人部屋のひとりを見視する
枕によこたわる
黄痘の顔
閉じている眼
眠れない深くぼみ
細い血管に
落ちつづける透明な

ながい点滴の時間
ふえていく老いの黒い斑点
痛みが唇にうごく

ああ あれもしとらんなあ
これもしとらんなあ
あれも これも
これも あれも
しとらんなあ

国道二〇八号線に
消防自動車の赤いサイレン
鎖をきってはしりだした
犬の遠吠え
裏のやぶ梅に白い花がつき
かすかににおってくる夜
冬にさらされていた南部鉄の風鈴が鳴
れて
さむい音をたてた

あれもしとらんなあ という
内田博よ

との依頼があった。おそらく内田博の最後の詩集になるであろうその詩集に今はまだ生きている人としての内田博との思いで、とても辛く書き難いものであった。それは死の予徴をふまえて励ましの言葉とならなくてはならない性質のものであった。

ふと『コスモス』同人でこれもガンで死んだ斎藤峻のことが思い浮んだ。斎藤峻も死の予告をうけていたが、それを本人は知らず、知ってる友人が斎藤が小康をえた時に、湯河原へ一泊旅行に連れ出し歓談して斎藤峻はとても喜こんだという。そのことが詩集への文章を書くこととかさなったりした。

私は入院中の内田へは励ます手紙やハガキを出し得る限り書いて送った。いつもそれは一方通行で返事は来なかった。それは予知していたことで内田の闘病生活が想像された。

内田が入院する前に私は『わが別離』を出していたので大牟田で内田は売るから送れと書いて来ていて、彼の交友関係の人々の住所を知らせてきて直接送るよう指示して協力してくれた。その友情は有難かった。

また中野重治とはその政治行動まで共に生きた人であるその律気さには私は参った。昨年九月二十六日に東京で『中野重治記念集』

’81』に出席するから今から旅費で苦勞しているとハガキをくれて、君も出席せよ、東京で逢うのが楽しみだと連絡くれたりしていたのに肝臓ガンで入院してしまいさぞかし無念であつたらう。

内田博詩集『童説』は出版された。

麟太郎は父の死の前にそれを見せてやりたいたと医師と相談してきめていたが、詩集が出来ても父と相談して出版の許可を得ていないものだから見せるわけにもゆかず苦慮したとどたと思つたが、詩集が出来てから父の許可を得て、出来たよと書いて手渡したとのである。内田はとても喜こんだとのことである。いい息子を持ったものと感慨がある。私と松永浩介との詩集への言葉を内田博はどんな思いで読んでくれたらうか。今は知るすべもない。

(一九八二・三・一)

内田博をおくる

松永浩介

内田博とはじめて逢つたのは昭和二十四年八月、吉祥寺の前進座、「芸術家会議」であつ

た。彼の名は『詩精神』で知っていたが「坑内」などの作品からがっしりした体軀を想像していたが細身のからだであつたのが意外であつた。

息子の麟太郎の詩集『これでいいへら』の出版記念会が鍛冶橋の国労会館で持たれた時、私はせがれ、麟太郎の名をおやちは駄馬のように生きたのでせがれにはキリンのようになつてほしいと希つてつけたのかときいたら、「いや、勝麟太郎からとつたのだ」と彼は答えた。大牟田は三井資本の城下町であり、昔から「中学出身者は雇わない」(それは小学校出の無知で従順な人間しか使わない、ということだ)といわれてきたその大牟田で内田博は生まれ、育ち、その抗いの生涯を終えたのである。道は色々な曲折があつた。坂には高低があり、時には辛らい挫折があつた。

「鈍重非才」これは内田がよく使うことばであるが私は何時も自分がいわれているように受けとつていた。

然し彼はそういういながらかなりのものを書き残している。恵まれない生活の中でこれ程書いてきたことはおどろいている。のろまな自分の仕事とくらべていうならばそれは正におどろきである。生活の上でたえず苦勞しながら

から文学の仕事をやりに抜いた内田の努力ははるばるであつた。

私と内田は二回、往復書簡を発表している。第一回は『京浜文学』(三号) 昭和二十三年頃(刊) 第二回は『三池文学』(二一号 昭和四五年五月刊) にのっている。らくでない生活の中で運動をしているお互いを励ましあつたのである。

内田と最後に逢つたのは五五年九月二〇日 中野重治没後一周年記念集の全電通ホールであり、その後別の場所での追悼会のあつた席上である。彼は元気で何やらスピーチをやつていたが会場がさわがしくなつていてよくきこえなかつた。司会を小田切秀雄がした。小田切が、私を指命したにはおどろいたが、とにかく喋つた。「親父、わりとうまく喋つたよ」と麟太郎が言った。と内田は書いている。

五六年八月十九日麟太郎から親父が肝硬変で入院したとハガキが届いた。続いて速達でガンで切開したが手術も手おくれで、父の病氣と競争で最後の詩集を編んでいるが『詩精神』ということで解説を書けという。引き受けたものの病状がはっきりわかつていたので病人には悟られぬように辛らい思いでやつと

書きあげた。

麟太郎の留守宅から死亡の電話があり、二十七日午前十時に電話で弔文を申込んだ。葬式に間にあつたかどうか、その時ウナ電があることをすっかり忘れていた私はここでも遺憾なく鈍重非才ぶりを発揮した。弔文を書いておこつた。

サヨナラウチゲヒロシ・ナカノサンニヨロシクイツテクレ。

彼岸の内田に

伊藤正齊

昭和四十六年(一九七一年)彼の六冊目の詩集『三里船津』が出る少し前に、東京に住む息子の麟太郎のところへ行った帰り、もういっ死ぬかもわからぬから、瀬戸の伊藤正齊に逢つていききたい、という伝言が、吉田欣一と岡田孝一からあつて、名古屋まで出かけて逢つたのが、内田博とはじめての出逢いであつた。ということ七年後に出た、『内田博全詩集』の別冊に書いたことがある。

豪華な『内田博全詩集』が出て、その出版

記念会に、吉田欣一、錦米次郎とともに出席して、上野の花山亭で二度目の元気な内田の笑顔に出逢つた。

その夜おなじ上野のホッケというホテルで、吉田、鈍、内田父子、版元の青磁社社主阿部圭司、内田の女友達たちと、夜おそくまで酒を飲んで話しあつた。彼もごきげんかなり飲んだ。

—これでもう死んでも悔はない。と彼はうれしそつた。

その次の日、内田、吉田、鈍とそろつともにも師である中野重治を桜の自宅に訪問して、歓談した。意外と元氣そうな中野であつたが、それが中野との永遠の別れになった。

その二年後の昭和五十五年の九月十五日に、『コスモス』同人の全国集會が、中野駅に近いサンプラザであつたが、そこで三度目の内田博に逢つた。三年の間、珪肺病で入院したり出たりの私よりも、彼の方が健康そうであつた。

おれの前に

夕あかね有明海がひろがる。

有明海は不知火の海につながる。

風光鮮明それさえも

毒もつ波とはかなしいことだ。
はるかに

雪西する多良山脈のつながりが見える。

なんで帰りを急ぐことがある。

遠くするどい雪の山容を見よ。

あの曲り角

日暮れてもうすぐらくならぬ。

(はるかに多良が) 最終節

この「はるかに多良が」が『コスモス』通巻七三号、第四次一九八一年七月、三四号の最後の出稿となった。

子息麟太郎から、去年の八月十二日に「父は五日午後四時、肝硬変のために、大牟田の市立病院へ入院しました。恐らく元の健康な体にもどることはできないであろう、半年もてばいいところ」という知らせがあった。

なかに、もう死ぬもう死ぬ、といひながら十年も生きのび、また『童説』まで出したではないか。それは息子麟太郎が全力をかたむけて出版元阿部圭司と、その友人たちとともに努力したということもあるが、それだけにこのわが詩集『童説』を手に入れば、また健康をとりもどし、元気になるだろうと、私は信じてうたがわなかった。

おくれってきた詩人

西 杉 夫

しかし、このことに関しては麟太郎の予感が当たってしまった。「ご厚情ありがとうございます。よろしかったら、ご批評を父宛にお願い致します。今朝、父と歩いている夢を見ました。明るく元気な歩きぶりでした。」八一年十一月十日。内田麟太郎。というハガキがとどき、その後、内田博自身の筆跡のハガキがとどいた。少しのみだれもなく、「誤植はあるが、よくやってくれたと感謝しています」というハガキをもらったので、これは大丈夫と私は思いをあらたにしたのに。

註(童説)の批評は、書評として、『新日本文学』一九八二年一月号に書いた。

北原白秋を愛読する文学青年として、とりとめのない心境詩をかいていた内田博がプロレタリア詩に転じたのは、一九三二年前のことだ。プロレタリア詩はその絶頂期をすぎようとしていた。詩集で見るかぎり、内田は

典型的なプロレタリア詩とよべるものを、そう多くかいてはいないが、第一詩歌集『夜の踏切で』におさめられている「牛」、「死と眼」と、「坑内」、「深夜の宮浦山」などはその範囲のものとする事ができる。すでにかなりの年月を重ねていたプロレタリア文学運動に途中参加する形で内田はこれらの詩をかいたのだが、このややおくれってきたように、内田の場合は特有の意味をもったように思われる。

ここにいたるまでの内田を見ると、まず少年時代には、ぼんやりしていることできわだっていた。利発な兄との対比で人々の口にも上るありさまで、それは内田の心を傷つけたにちがいない。それからやがて絵筆にぎり、ついで文学というわけだが、内田の『小さな文学史』(上巻)には、初めて文学の集まりに出たときのエピソードが記されている。そのとき内田はわざわざ名刺を作り、それを配りながら頭を下げてまわったというのだ。はなはだ非文学的といわざるをえない。初めてそんな会に出席することになった貧しい青年の、せいっぱいの自己主張が感じられて、いっそう軽べつする気にはなれないが、ともあれあるずれば否定しようもない。

そんなコースをへながら内田がたどりついたプロレタリア文学はそのときどういう状況だったか? 内田は知らなかったが、三〇年には戦旗大牟田支局が作られている。そしてそれから数年間は大牟田でも若き精鋭たちによって、はげしい政治的、文学的活動がつけられたのであり、新しくそれに加わった内田にとっては、まぶしいようなものであっただろう。たとえばその活動家の一人として西原正春もいた。内田は西原についてじつによく語って倦むところがないが、この西原こそは内田にとって、プロレタリア文学の星ではなかったか。西原は内田より三才ほど若かったにもかかわらず、すでに文学雑誌を出していただけでなく、三一年の福岡全協事件では一九才で検挙されている。すべての点で内田より、一歩も二歩も先にいた。内田の方からいえば、ふたたびおくれた側として、西原に、そしてプロレタリア文学に対することになった。

内田は三一年ごろまではプロレタリア文学をいくらもよんでいなかったという。むしろ若さもあつたし、境遇ということもあつたが、よめばよめる条件にあつて、しかしプロレタリア文学とはかみあわないところで文学への

道を進んでいた内田が、短期間のうちに変貌したのはそれだけの理由があつた。たちどころに内田の考えを切りかえてしまうほどの衝撃力をプロレタリア文学がもつたのは、それを受け入れるだけの素地が内田のなかにあつたためであろう。小学校を出ればもうすぐに働かなければならなかった内田の生い立ち、その雑労働に明け暮れなければ生きてこれなかった全経験。

プロレタリア文学におくれてかかわったとき、内田はそういう生活をふまえて、自分とその周囲を鋭くとらえればよかったのだが、実際は型どおりのアジテーターとなる。おくれた参加の意識があせりを生んだ。『新大牟田新聞』の三三年新年号の詩の選を内田は依頼されているが、たとえばその選評の公式的高ぶりなどにも、それはよくあらわれている。プロレタリア詩の欠点ばかりを集めたような詩を一位に押し、歯の浮くような賛辞をのべているのだ。

ところでそのように入ってしまったプロレタリア詩の世界では、内田が硬直したスロガンをもつた時間、あまりにもわずかしか残されていなかった。内田も加入した日本プロレタリア作家同盟は三四年には解散

している。権力の弾圧と内部の指導の誤りと二重の力を受けて、政治でも文学でも、その組織は一気にくずれいった。内田はいやおうなしに生身で現実とぶつからざるをえなくなった。

内田のプロレタリア詩は、すでにふれたようなものがあるが、当時の主流的なスロガン主義にたいして、それに没入できない現実直視の面をもつていた。内田としては革命万才へ向かって背伸びしようとしながら、しかしそれはできないものを資質として引きずっていた。そこが内田の強さなのだ。まして運動が崩れていくと、そういう現実的側面はいっそうクローズ・アップされるというわけである。

いまわたしはこの短い文章で内田の詩全体を論じようというわけではない。ただ内田の詩を解くカギのひとつは、以上のようにややおくれて状況に対するようになりがちだった内田が、そのおくれた地点をどうとらえるかによって、詩が強くも弱くもなっているのを見きわめることにあるのではないかと思う。おくれってきたにしても、そのことは別にどうということはないわけで、むしろ冷静にあたりが見えることを特権として生かすく

らしいことである。事実、プロレタリア詩後期とそれにつづく戦争中の詩に、つまり自分以外のものを考慮していない詩に、内田のすぐれた部分があらわれている。

だが反面、そのおくれを意識して背伸びしようとするとき、プロレタリア詩の公式主義者が出現するわけだし、おくれを嘆き悲しむとき、だからとした懐古的な詩が生まれることになる。もちろんこれは詩だけのことでなく、さきにあげた西原正春についての文章などの、センチメンタルな調子にも関係のあることである。どうも内田がかくわりには、西原の詩人としてのイメージはくっきりしてこない。西原の詩がナイーブな語り口をもってはいるにしても、内田がいうほどにはいいものと思えない。むしろわたしは西原の詩について何ほど知っているわけではなく、内田が引用、紹介している範囲でいうにすぎないが、内田の目が青春への追憶の涙でいささかくもっているのではないかという気がする。友情は友情として、大いにわかるにしても、ともあれ内田さん、もっといえおいていればよかったんだ！ あなたの長い年月、この世を見つづけてきた目であたりをじろりと見まわしながら、あなたがたつて信じた政党が

どんなにだめであったにしても、そんなことはひとつも嘆くにはあたらない。ただはげしく、全面的に否定さえすればそれでいいのだ。むかしのあれこれについても同じ。詩は後世に恥をさらすものだったつらめ考えから、くどくどと愚痴を並べたところではないなんになるだろう。そしてそんな弱さをいっばいにくりひろげながら、しかしあなとは根底のところ、権力に従うことのない詩精神を保持しつづけたし、そこにだけあなたの詩の意味はある。

内田博のことすこし

緒方宗平

今朝（二月二十七日）の新聞で内田博の死を知った。肝ゾウガンの手術をしてその結果がたいそう良くないと麟太郎さんから受けて本当のところ「やっかいなことになったな」とおもった。遠慮がちにはあるが、その日のあることを、だから人にはいえることでもないが不安でなくはなかった。生れるということとちがって、死ということはそれが見ず

知らずの人の場合でも暗い穴がぼっかりとあく。まして彼の場合は見ず知らずの人の死とはちがった穴が大きくあく。私などのいうまでもなく彼の詩歴はない。大正の後半から書いている秋山清さんには及ばないが、然し昭和七年ごろにはすでに書いていたというから五〇年にはゆうになる。その間休むことなく書きつづけてきたし、その間の五〇年の重み深みは昭和生れの者が社長になったという五〇年とは、いささか趣きがちがうだろう。

内田博は私などがいうまでもなく詩歴もながい。その間に多くの詩集も出した。立派な全集も出したし、父の生前に出したいといっていた麟太郎さんの願いもかなえられて彼の最後の詩集もできた。詩人内田博としてはもって真すべしであるかもしれない。

内田博のことを急ぎおもうと若しサナギが糸を吐きつくして自からの殻のなかに沈んでいくものであったら、詩人内田博はそうではなからうかとおもってもみる。

1982. 2. 27

蟬しぐれ

木原 実

思いだすこともなかった

母の命日に

選挙があり

翌日、落選がきまった

四日おいて、郷里の義弟が死んだ

快活なそぶりで過した戦中派の技術屋は

蒼黒い塊りになって白布をかぶっていた

金曜日通夜

土曜日は友引

日曜日酉の日

風通しの悪い座敷に棺をおいて

死臭になじんだ

追っかけて大阪から

次妹の夫のしらせがきた

日中戦争の勇士は

死の床でも酒をあおった

次妹はやつれて貧苦の日を語った

紙の旗をかざし

三度棺をまわして送った

夏の冷雨のつづくなかで

こんどは九十三歳の伯母が東京で死んだ

家中の采配を振ってきた老婆は

崩れてしまった血縁の共同体を

通夜のにぎわいに蘇らせた

伯母が若く

母もいた幼いむかしのことを

みしらぬ縁者とおそくまで語りあった

撰津神峯山寺の住職は

暗い須弥壇に燈明をかかげ

声をふりしぼって私の名を叫び

母の名を呼んで喝をとなえた

お母さんは喜んでおりましたぞ

僧は汗をふきながらいった

店じまいした田舎の店さきで

母はいつも私の帰りを待っていた

いなくなった母の歳月を

にぎやかに長く生きて

遠くからまた母はやってきて

少年の私をはずかしがらせる

死んだ連中は

懐しいものばかりのこして

やさしげに

蟬しぐれの寺で

あわてて布施の金をつつむと

もう時間がなかった

鐘楼で白昼の鐘を撲き

蟬のこえの消えた坂道を

いっさんに駆けおりてきた

風景

向井 孝

午前三時半。

ぼくの、きょう一日の、終り。

郵便を出しに行く。

部屋の灯はつけたまま。

—今日ひるま、自転車で区役所へ

「印鑑証明」をもらいにいった。

かえり途、「あっ、忘れもん」と

あと戻りしたとたん、向うから自

転車が走ってきて、そのまま追

越していったのやった。

うすあかりの露地。

片側は、ずっと長屋風の軒がならんで

東側は、日本写真学院の

汚れたセメント壁つづき。

その壁に取付けた外灯が三ヶ所
ぼくの足許を、

きいろく、順番に照して行く。

あの軒下に、いつまでも立っている

ぼんやり黒い影は、植木棚らしい。

.....

—そーや、やっぱし.....

今日ひるま、すれちがったとたん

左右に大きく後姿をゆすりながら

はげしくペダルを漕いで行った、

あの、ジャンパー服のあいつは.....

.....

透かして見通せる表通りまで、しいと

して、

谷間みたいに細長い、約百メートルの路。

自転車一台、

出口の電柱にくくりつけられて

置きっ放しになっている。

* * * * *

表通り。

トンネルを抜け出たような

夜空が、一べんにひろがる。

かたまっぺんなくまっぺん

路上駐車の大きな黒い影。

通りへ出てくる小路の、いくつものくら

がりを、

遠くの街灯が、あわあわ照し出している。

手紙を入れると

ポストのフタが、ガチャーンと鳴る。

.....

—そーや、たしかに.....

まるで一べんもふりむかず、みる

みる小さく、まひるまの阿倍野交

差点を、一さんに渡っていった、

あの、若い大男の、あいつは.....

.....

ガチャーン、ガチャーン、ガチャーン

まるで荷造りしたように、固く閉して

息をひそめている、タバコヤの店先き。

だんだん大きく、まわりの夜気が

しだいに鳴ってくる。

故 旧

申 有人

もう久しく会ってないが いつか

またおれのところへ帰ってくるだろう。

この地に同胞はたらがいる限り

どこかで必ず生きているはずだから.....

ながく異郷に流離う哀歎に

影のように寄りそって

涙を溶かし いのちを歌う

ことばなくきみが醸した清い流れは

遠い不在に洩れたおれの胸の奥へ

やさしく浸み入った。

母がこよなく愛し育てた

幼な馴染みよ

みんなが寝静まる夜更け

凍える寒さから

生れ出るおまえの生命を護るように

注意深く甕をポロで包んでいた母も

いまはいない。

日本の冬の風が

あばら家に音を立てて吹き晒らす

わたしの幼ない頃だったか。

異郷でいつも同胞と苦勞をともにした

きみは通過儀礼の添物ではなかった。

解放後

日本列島の炭坑から軍需工場から

二百万の朝鮮人が掃き棄てられた時

彼らを餓死から護ったのは

物言わぬきみだった。

日本の武装警官隊と税務役員が

密造部落を襲い

きみを拉致しようとした時

朝鮮のオモニたちは

いっくしみ育てたきみを叩き割り

白い血液で部屋中を洪水にした。

拉致された者だけが知る痛みへの

自殺だったか。

もう久しく会ってない

幼な馴染みよ

成長した息子たちも もはや

きみを知る者は少ない。

けばけばしい包装ヒラキで扮飾された

今日の一日を

眼を閉じて嘸みこむ

老いたおれの喉は

今もどこかで純潔に生きつづける

きみを切なく憶う。

この地の人たちはきみのことを

にこり酒 ドブロクと卑称するが

おれはきみのながき栄光の伝説のため

正しく本貫の マツカリと称ぶ。

八二・二月

戯詩紙芝居

伊藤正斉

デデン デンデン
デデン デン
胃壁
ノ感情ハ 肝硬変ハ
酒精ヲ拒否スル
デン
情性ヲ ユルサズ
デデン
盗ル トル
トイフ感情ハ
トコトンマデ ヤク ヲ流シコム
ヤク ヲ少女ニ ウチコム
デデン

百舌鳥

河合俊郎

目がさめると夜明けだ
手を見るところす黒い斑点がある
年とったな
また冬眠に入る
目がさめる
越冬おわり 起きあがる
午前一〇時 ゆっくり歩きはじめる
年とったな
浜藪のうす暗がりを抜けると
ぱっと光が強くはじける
風はまだ冷たいが
波の音がやわらいでいる
空は青い

カアン カッ カカン カカ
麻酔ヲ カモシカニ 撃チコム
カカン
カン カン カッ
生キモノ
コトゴトク
滅ビ
デン
ナオ生キ残ルヲ信ジルモノ
デデン
デンデン デデンデン
サアサ コイコイ 飴アメ オイシイ飴
デン
オヌシモ オレモ飴一本
デデン
カカン カン
デデン カンカン カッ

海原のはての水平線に小さい黒一点
鳥か船か
海はいつも動いていて騒々しいのに
なんという静けさ
南面の砂礫をもちあげてスゲの芽がのぞく
いのちはぐくむ生きものたち
そこから神秘的な物語りが放射してくる
しばらくしてあいつが飛んでくる
嘴の鋭いほらほら狡猾な鳥あいつ
胸をはり渡りそこねて
きよろきよろあたりを警戒しながら
突然一声けたたましく
浜藪の暗がり裂いて叫ぶ
弱い小鳥たちがはらはらと逃れ散る
老鳥ここにあり
どちらが敵か味方か
はつきり教えてあげよう

(一九八三・二・二八)

シエルター（地下壕）

押切順三

しめつけるこの不安に、
おれは走る。
シエルターの入口を探す、
ゆうべ秋田を出て
けさ着いたばかりで、
この東京の不安。
赤坂・溜池 このあたりに
横穴があるという話を聞いた、
そのシャッターはどこにある
街を回る、
壁をたたく、
地下道の突きあたりのへんか、
だめだ、
おれを入れるトビラは

どこにもなかった。
いや、おれは
シャッターを開ける暗証カードをもっていないの
だ。
連れができる。
いっしょに行こうという
一家七人、死んでたまるもんかという
この国の東京に住んで
水も空気も、蓄えがないんだ、
行こう、あの森だ
勝手知った参賀の道、
日の丸ふって押しいって
—電車がとまった、
空気がチカチカしてくる。
おれひとり、
シエルターの道をころげ落ち
汚物ためて浮き沈みするのはやめた。
この原っぱの、
ここは日本、東京というのか、

松の枝に刺さって
ぶらさがって。
それもいい、

—一九八二・二

停留所

村松武司

夜の停留所でバスを待つ
右手の暗闇の奥から街道ははじまって
左手の暗闇のなかに終るようである。
標識燈がわたしの頭上にともっており
雪が巻く
睫毛にかかり
額に落ちて溶けるのを感じる。
かあさん、わたしが濡れますよ

病室でしきりに眠ろうとして
だんだん小さくなってゆくひと
さよなら。
病室の窓の下にはげしく雪が舞って
わたしがバスを待つ。
夜あけまで、バスは来なくていい。
最終の赤ランプをともしたりして
遠い闇のなかから
来なくていい、救いはない。
もう死は誇らなくていい
遠い廊下をわたって会いに来なくていい。
戒厳解除
悲しみをもっと悲しくさせるではないか
われわれは、いっそこで凍る
はるかに、遠く、宣告をうけた人たちよ
われわれは死を待つ
バスを待たない。